

久隅守景の四季耕作図に関する考察

—東京国立博物館蔵「耕作図屏風」の図像と主題を中心に—

帯刀 菜緒 (島根県立美術館)

久隅守景(生没年不詳)が多数の作例を描いた四季耕作図という主題は、南宋・楼璣の「耕織図詩」の「耕図」の図像をもとに、南宋以降様々な作例が展開し、日本に流入して成立したものである。中国の耕織図や日本における四季耕作図の図像化と展開に関する研究は近年大きく進展している。本発表では、久隅守景「耕作図屏風」(東京国立博物館蔵 以下、東博本)の図像を検討し、特に同時代狩野派の作例との比較を行うことによって、守景画の位置づけを再考する。その上で、楼璣「耕織図詩」の漢詩文に基づき画家が新たに取り入れた図像の存在を指摘し、守景の特異な作画姿勢を明らかにしたい。

近世初期には狩野派内で多数の四季耕作図が制作された。狩野山雪周辺では明代の版本や朝鮮絵画など、将来絵画からの図像を積極的に取り入れた耕作図が描かれており、また、狩野探幽周辺では描写する作業内容を減らし、余白を大きく取る耕作図が描かれたことが指摘されている。そのような中で守景の耕作図は、綿密な山水空間表現、農村風俗描写の豊かさにおいて、明らかに同時代の狩野派作例とは異なる特色を見せる。図像比較から、守景が京狩野派と江戸狩野派、双方の耕作図の特徴を取り入れていることが判明する。また、守景の耕作図は将来された農書系版本や将来絵画からも豊富に図像を取り入れている。

しかしながら、守景の耕作図には、そういった図像的なソースを探るだけでは解明できない情景描写の豊かさがある。東博本の図像の典拠を検討していく中で、四季耕作図という主題の成立源である楼璣「耕織図詩」の詩文をもとに守景が新たな試みを行っていることを発見するに至った。「耕織図詩」詩文が記述する農村の情景、例えば、収穫を終えた帰り道で農夫が月を見上げる情景や、農作業を終え、家畜を川で洗うといった情景を、守景はその漢画耕作図中で絵画化しているのである。東博本で、早春から晩秋にかけての季節の移り変わりが朝から夕にかけての一日の時間の移り変わりに重ねて描写される点も、「耕織図詩」詩文に典拠があると言える。漢詩文の描写する内容を図中に再現する、このような新しい耕作図を生み出す試みを守景が行い得たのは、守景と同じく加賀藩と深い繋がりを持っていた儒学者木下順庵の存在が大きいと考える。順庵による漢詩文の一部には、「耕織図詩」からの引用と思われる箇所がある。

以上のことから、守景の四季耕作図は周辺の様々な狩野派作例や版本を学習した上で、楼璣「耕織図詩」詩文を典拠とする新しい図像を加え、詩の中の情景を画中に再現する新しい試みを行ったものであることが指摘できる。また、守景の和様四季耕作図の作例にも「耕織図詩」詩文からの解釈と考えられる図像が見られる。このような守景の作画態度の一側面は、「納涼図」(東京国立博物館蔵)のような作品を検討する上でも重要であると考えられる。